

詩 追憶のカイロ (8)

カイロで過ごした経験のある読者のなかには、とよださんの詩が、ほのぼのとして暖かく、懐かしいカイロの情景を思い出させてくれると、喜んでくださり、次回を待っている方々もいて、とてもうれしく思います。

この詩集は、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のことになりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争（1973年）後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。当時も今も、近隣で紛争や内乱が止むときはなく、ジャーナリストとして多忙を極める夫君の仕事を支援しながら、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて、5歳と3歳の幼い子供たちを育てていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した不安な世界をつなぐ何か暖かいものを感じることができるともかもしれません。

今月の掲載詩は「トマトと母」です。人は誰でも遠くにいると、故郷を懐かしく思い、特に苦勞して育ててくれた母親のことを懐かしく、またいとおしく、ときに悲しく、思い出すものです。とよださんの「トマトと母」には、戦後の困難な時期に僅かなトマトを思い出のこもった高価な帯と交換して、食べさせてくれた母親の思いを、遠いカイロで思い出す光景を紡いでいます。冷静な言葉で紡がれているだけに、いつまでも読む者の心を揺さぶります。
(塩尻和子)

とよださなえ

トマトと母

クレオパトラの鼻がもう少し高かったら
という話じゃなかったんだゾー
クレオパトラの鼻の高さじゃなくって
肥沃なナイルデルタのことだったんだゾー
覚えとけ！
三十年前に世界史の教師がいった

“奥様、キリストとクレオパトラは
どちらが年上だったのかしら？”と
お茶会で隣の席の夫人が声をかけてきた

住む場所をカイロに替えたら
それまで すり抜けてきたことが
水面に出てきた

カイロからアレキサンドリアへの道は
ナイルデルタの逆三角形のまん中を北につきぬける
砂漠の空には見られない
曲線のある雲が浮かび
どこまでも続く水田の緑は
日本でも準内地米といわれた源だ
真っ白で巨大な帆が稲田を横切るのは
そこに河川水路や運河が走っていることを
知らせてくれる
紀元前からシーザーもアントニウスも
権力の下に交通手段や情報手段をもって
ナイルデルタの価値を知っていた
二十年たってもカイロの住民は
その全貌を見ることなく
大半は人生を過ごす

日本の敗戦は私六歳 母三十六歳
第四次中東戦争後のカイロ滞在は
娘六歳 私三十六歳という時があり
二つの戦後を母の目とダブらせて
見る癖が出来た
日本の戦後の物不足という単語が
食料難と同義語と思い込んでいたのは
衣・住よりもお腹の感覚が強いということか
キャラコの配給
お酒やタバコの配給となぞれば記憶はある
カイロでは
油・砂糖・紅茶・米の配給以外
肉も魚も野菜も果物も
隣組の組長さんの手を経ないで
誰でも買えた
ヤミを拒否して餓死した日本人の話を
エジプト人に伝えるのはむつかしかった
カイロには何も無いと言い切ってしまう
戦後生まれの日本の人々に

果物の山を指し示しても
あることが当たり前で まるで無感動だった

オレンジやマンゴーは
ピラミッドの形に積み上げられ
紫や緑の葡萄も無花果も
深い藁の籠に詰められている
たたずまいは
アダムとイブのふるさとの傍に
いることを
思い起こさせ
近代戦とは関係なく
五千年以来の営みなのかと思う

昭和二十年の夏だった
帯と着物を
たった二個のトマトと一合のお米に
交換してきた母は 病気の私に
トマトの汁を絞ってくれた
が 私はすぐに戻ってしまった
「かわいそうに 苦しいかい！」と
洗面器にただの汚物となった赤い汁を受け
うがいをさせてくれた母
数時間か前にタンスから帯と着物を取り出し
一瞬 手をとめ 心を励まして風呂敷に包み
「良いものを持ってきてあげるから おとなしく
寝てなさいよ」と言っていた母だった

安価で自由には買えるトマトと
健康そのものの六歳の娘を
目の前にしながら
私はたじろいだ
母の真似は自分には出来ない
と知ったから

「こんなに立派なトマトよ」と両手をかざした母は
無邪気にはればれとした顔を見せ
勝手口に消えた
あんな真似はとても出来ない
トマトのせいかな
古い家の間取りとタンスとふとんの位置まで
記憶を新たにしたら

カイロには何もない　と言いつ切る
日本から来る人々の言葉に
改めて　わだかまりを覚えた
畑に行ってみよう
母に近づく真似ごとでもいい

野菜畑に行くのがむつかしかった
車がないと　自分の足で歩く以外
移動が出来ない
タクシーを待つのに
炎天下　一時間も立っていれば
脳味噌の水分まで奪われてしまいそう
バスとなれば　バスに乗ることが曲芸の域だ
乗車口にぶら下がっている人に飛びつき
降りる時は止まることのないバスから
飛び下り　後続車に轢かれないよう
駆け抜けなければならない

やっとなんと郊外の野菜畑を
亜理　亮介の手をひいて歩けた
トマトもなすも
太陽の光の中　色濃くピカピカしていた
ビニールが大地を覆うこともなく
太い茎がスックと立っていた

市場とか動物園とか大使館でなく
畑に行きたいという私の目的の意味は
同行のムスタファにも不明な位だから
外国人一行が畑に立っている図は妙らしかった
木陰も小屋もなく無人と見えた畑から
次々と人が湧いて出てきた
なすの畝の間にでも横たわっていたのか
ムスタファは保護者の態で
彼らに小銭を渡していた
畑に立つだけでバクシーシ（チップ）がいるらしい

空豆の畑の所に来た時　私の足は止まった
縦横全く隙間がなく空豆が繁っていた
畝がない畑というのは異様だ
かがんでみると

ヒョロヒョロの苗が多く 花も実もない
太めの苗のさやも齧りかけの行列だ
それでも所々に無傷のさやが見られた
このさやを採って あの安くておいしい
タメイア*を作っていたとは
種を蒔くというのが
空豆を隙間なく土に敷き詰めることだった
なすやトマトの所に畝があり
どうして空豆にはないのだろうか

ナイルデルタの頂点に立ちながら
世界史の先生に伺いをたてたくなった
貧しいエジプトといわれながら 戦後でも
野菜の配給制度がないというのは
肥沃なナイルデルタの実力と自信なのか
寝ていてもバクシーシをくれる人間を感じる
超能力にあるのか
虫に充分たべさせてから収穫する農法の
自然と人間の間を心得ているということなのか

* 空豆の粉を練りパセリを入れた揚げ物